

## 現代ギリシア詩に於ける「俳句」の受容(1) -セフェリスの『練習帖』『練習帖2』を中心に-

高橋 りえこ

### 1.はじめに

#### 1.1.術語について

日本の俳句は、外国語への翻訳を通して海外で広く知られるようになり、一つの新詩型として定着するに至ったことは周知のことである。以下1.2.及び1.3.で詳しく述べるように現代ギリシア詩に於いても *χάι-κάλι* 或いは *χάι-κου* と称される詩型がある。この詩型でかかれた作品は、季語や切れ字といった手法が用いられていないところから、日本の俳句とはかなり異なるように思われる。そこで現代ギリシア語のみならず外国語でかかれた、或いは翻訳された俳句と日本の俳句を表記上区別するため、前者を「俳句」、後者を俳句と「」の有無で書き分けることにした。また「俳句」と同一のものを示す俳諧に対しても、原義の俳諧と区別して「俳諧」の術語を用いる。フランスでは「俳諧」が、英米では「俳句」が一般に用いられているが<sup>(1)</sup>、ギリシアでは、*χάι-κάλι*と*χάικου*の二通りの術語が用いられ未だいずれかに統一されていない。現代ギリシア語でかかれた「俳句」の概要を記述したΓ.Π.サビディスに倣い、便宜上「俳句」を術語として用いるが、必要に応じて「俳諧」も採用することにした。更に作品そのものではなく、詩型を示す*χάι-κάλι*、*χάικου*に対しては、俳句詩型という術語を当てることにする。既ち一行目と三行目が5音節、二行目が7音節の無韻で三行から成る詩形を俳句詩型と呼ぶ。

#### 1.2.文学史的背景

サビディスによれば、現代ギリシア詩に初めて俳句詩型の詩が現れたのは1930年代後半とされる<sup>(2)</sup>。これに先行して20世紀初頭、翻訳を介して俳句が「俳諧」という名称でフランス詩壇に紹介され、多くの「俳諧」詩人を輩出したが<sup>(3)</sup>、このフランスでの「俳諧」の大流行がギリシア詩壇に与えた影響は、ギリシア詩でかかれた俳句詩型詩が例外なく「俳諧」と称されていることから看取される<sup>(4)</sup>。

1930年代、新聞「エスティア」の文芸欄にΣ.スキピスが数十回の連載で「俳諧」を紹介している<sup>(5)</sup>他、1938年から1960年にかけて(1942年から1946年まで四年間は中断されたが)文芸雑誌「タ・ネア・グラマタ」にΔ.アンドニウが現代ギリシア語による「俳句」を117編、5-7-5-7-7の音律をもつ無韻五行から成る短歌詩型の詩を30編発表している。またΓ.セフェリスが「14の「俳諧」」を詩集『練習帖』(1940年)<sup>(6)</sup>に収めている。

しかしながら俳句詩型が広くギリシア詩壇に知られ、同時に「俳句」が術語として浸透していくのは、1963年、セフェリスがノーベル文学賞を受賞した以降のことである<sup>(7)</sup>。前述のアンドニウやセフェリスを中心とするサロンの集いに参加していたΖ.ロレンジャトスを初め、ギリシア詩人により、多くの「俳句」が生み出され、これにより俳句詩型が新たな短詩の詩型の一つとして定着していく。

### 1.3. 現代ギリシア詩にみられる「俳句」

「俳諧」「俳句」という題で作品を発表した、或いは実際に俳句詩型で「俳句」をかいたギリシア人は上述の三名を含む15人が現在確認されている。以下にロレンジャトスを除く<sup>(8)</sup>14名の作品の傾向を簡単にまとめると同時に、2.で詳述するセフェリスの「俳句」詩人としての詩壇に於ける位置づけも行いたい。

#### a) 無韻三行詩、或いは無韻短詩に対する名称に用いられた「俳諧」

現代ギリシア文学史で初めて「俳諧」という題で、5-7-5音節の音律を持たない無韻三行詩をかいたのは、Π.クリネオスとされている(参照、註2)。この他にもN.ハジキリアコス-ギカスの「軍隊の「俳諧」」、Γ.セオハリデイスの「25の初めてのギリシア語による15音節「俳諧」」が挙げられるが、いずれも5-7-5音節の音律を用いていないため、厳密には俳句詩型による詩、即ち「俳句」とは言えない。サビデイスが指摘するように、詩人が「俳諧」を無韻三行の詩、或いは無韻短詩と誤って捉えている可能性が考えられる<sup>(9)</sup>。

#### b) ギリシア詩壇に於ける新詩運動と「俳句」

1920年代のフランス「俳諧」詩人たちの活躍に触発され、またイマジズム運動の影響を受けて、ギリシア詩壇にも「新しい詩」を模索する動きが起こる。ギリシア詩壇でのこの新詩運動の中心に位置し、好んで、或いは試作的に俳句詩型を用いた詩人として、アンドニウ、セフェリスがいる。彼らを「俳句」詩人の第一世代とすれば、1970年以降新詩運動後の第二世代に、Γ.ネノス、A.ノベリス、Γ.バヴロプロス、Π.スタヴラカスが属する。第一世代、第二世代共に俳句詩型を用いた点には変わらないが、ギリシア詩壇に新詩運

動を通して俳句詩型を定着させたのは第一世代の詩人であることが、この二つの世代を分かつと言える。更にここに挙げた詩人たちは、俳句詩型を表現の手段とし、独自の詩情を「俳句」により込んでいる点で次のc)のグループと区別される。

c) 東洋趣味に傾いた「俳句」

時代的には第二世代に含まれるが、芭蕉や蕪村の俳句の翻訳がもつ日本的或いは東洋的な情調を、自らの作品に盛り込もうとしたグループがある。ともすれば翻訳の「俳句」の模倣に終わり、独自性に欠ける傾向が指摘され、特筆すべき作品は僅かしかない。このグループに属するのは、Γ.カランドニス、E.ソマイドゥ、A.ラブティーティフォナ、O.M.デフネ、N.フリリグである。

## 2.セフェリスの「俳句」受容

1.でギリシア詩壇に「俳句」が輸入され俳句詩型が定着するに至る過程と、その中でセフェリスが果たした役割について触れた。ここでは、一步進んでセフェリスがどのようにして俳句を知り、また自らも「俳句」をかくに至ったかを推察し、詩人の「俳句」受容の過程を辿ろうと思う。

### 2.1.「俳句」との出会い

セフェリスが最初に「俳句」に接したのは1918年から六年間に亘るパリ留学の間と考えられる<sup>(10)</sup>。正にこの時期、フランスでP.-L.クーシューやM.ルボンにより「俳句」が広められ、多くの「俳諧」がフランス語でつくられた<sup>(11)</sup>。法律を学ぶ傍ら文学を志していた若きセフェリスが、このフランス詩壇の動向に無関心であったとは言い難いであろう。実際、以下に挙げる三点から、フランスでの体験が詩人の「俳句」受容の出発点となっていることを示唆できよう。

a) 詳細は2.3.に譲るが、セフェリスがギリシア語に翻訳した芭蕉と其角の句の底本<sup>(12)</sup>とされる『其角の俳諧』(参照、註12)が1927年パリで出版されている。

b) 現在確認され得た詩人の「俳句」約40句(うち3句は翻訳)のうち1940年以降に作られた5句(3句は翻訳)を除き、パリ留学より帰国した直後1930年代初頭に集中してかかれている。

c) 1972年出版の『詩集』で改題されるまで「俳諧」と自らの俳句詩型の詩

を称している（参照、註6）。

推察の手掛りとなる資料には、パリ留学時代以前に「俳句」に接したと思われる形跡がない上に、ギリシア詩壇に「俳句」が登場する時期を考慮すると、「俳句」がフランスで如何にもて映やされたかを目の当たりにしたのが「俳句」を知るきっかけと言って良いだろうと思われる。

## 2.2. 「俳句」受容の第一段階

セフェリスはパリから帰国した後、1930年代に集中して「俳句」をかいている。詩作の際に、試行錯誤を繰り返した可能性を物語る記述が、詩人の『日記』と、評論家A.カランドニスとの『書簡集』に僅かながら残されている。

...もう少し「俳諧」（即ち俳句詩型）で何かをしてみたいと思う。あれ（初めて『日記』に「俳句」がかかれた1929年）から何年も経つというのに（「俳句」）はまだ足りない。一瞬、一瞬、「俳諧」を生みだしていった魂の躍動感はこちらにはない。

（ ）：筆者補注。

『日記、第二巻』p.86。1932年8月27日

...トニオ（アンドニウ）の近況は喜ばしい。何かが出て来るかも知れない。かかせてみよう。トニオのとわたしのを引用しながらこの種の詩について試みをしてみたい。わたしにも（「俳句」が）幾つかある。

<『転回点』から>何年間も習作としてもっている。左手の習作。

下線部：セフェリス。

< >：校訂者補注。

『書簡集』p.130。1937年2月13日

これらの記述から試作－セフェリスによれば習作（*άσκηση*）－を繰り返し詩的芸術性の高い「俳句」を生みだそうとした詩人の意図が窺われる。自由詩の可能性を模索する過程で俳句詩型の外に、マライに伝統的な詩型pantoumを用いた詩<sup>(13)</sup>を一作品だけ残しているが、俳句詩型と異なりこの詩型を繰り返し使うことはなかったことから、セフェリスの新詩運動に占める俳句詩型の位置の重要性が推察されよう。このように、新詩運動と平行して「俳句」を多く試作した時期を、詩人の「俳句」受容に於ける第一段階と呼ぶことができよう。

ところで上述の『書簡集』の同一箇所には俳句詩型を詩人エリティスにも

紹介し、実験してみるようカランドニスにセフェリスが依頼している一節がある。

… 趣味としてエリティスにも（「俳句」）をかいてみるよう手紙でいってくれたまえ。知っておくべきことはただ一つ。第一行と第三行が5音節、第二行が7音節ということだけ。

五音節／七、五で「俳諧」／うたごごろ<sup>(14)</sup>

『書簡集』からのこの二つの抜粋から、詩人とその友人アンドニウが中心となってギリシア詩壇に「俳句」を導入したことが指摘され得るように思われる点を付言しておく。

### 2.3. 「俳句」受容の第二段階

第一段階に続いて、詩作と平行して1940年代後半からより積極的に外国文学の翻訳に取り組んだ時期を、「俳句」受容の第二段階としたい。帰国直後から既に着手されていたA.ジッド、P.ヴェレリに加えて、新たに、T.S.エリオット、W.B.イェーツ、E.パウンド等の英詩研究が進められ、1965年翻訳集『転写』が出版されるに至る。ここで注目すべきはイマジズムの旗手で、詩「地下鉄の駅にて」に於て「俳句」にヒントを得た、具体的な二つのイメージを重ね合わせるという独自の手法（重置法）を実践したことで知られるパウンド<sup>(15)</sup>の作品（『カント』）が『転写』に翻訳されていることである。詩人のパウンド研究を通して「俳句」観が形成されたのではないかと考えられ得よう。

またこの時期に、翻訳の助けをかりてセフェリスが芭蕉を研究していたと思われる形跡が『日記』に見られる。詩集『つぐみ号』（1947年）の清書と細部の修正に入ったという記述に続いて、芭蕉とその弟子其角との間のエピソード<sup>(16)</sup>が回想される。

…（散歩の帰り）山を下りながら芭蕉が其角に論して言ったことを考えた。＜神が創りたもうたものを卑しむべきではない。「俳諧」（即ち其角がよんだ句）は（このように）順序を逆にしなくてはならない。

一匹の赤とんぼ／羽をとってみよ／赤唐辛子<sup>(17)</sup>

ではなく、

赤唐辛子一つ／羽をつけてみよ／赤とんぼ<sup>(18)</sup>

である。＞

< >：詩人による引用符。

『日記、第三巻』p.76。〔1946年〕11月1日

また1972年2月27日付新聞「ト・ヴィマ」紙上に掲載された詩人のエッセイ「神々に満たされたる全てのもの」の中に、芭蕉の句

むざんやな甲（かぶと）の下のきりぎりす  
のギリシア語訳を見ることができる。

運命のいたずら／甲の下に啼くは／こおろぎ一匹<sup>(19)</sup>

この訳は後に『練習帖2』<sup>(20)</sup>に収められるのだが、『セフェリス夫妻所蔵文献目録』に確認することができる湯浅信之訳による『おくの細道』からのギリシア語重訳であろうと推察できる。上に挙げた芭蕉の二句をもって、セフェリスが特に芭蕉の「俳句」を研究していたと言うのは危険かも知れない。しかしながらセフェリス後半の詩、特に『つぐみ号』を理解するためにはM.アーノルド、T.S.エリオット、K.Π.カヴァフィスに加え、禅と芭蕉が詩人に与えた影響を調べてみる必要があるとM.ヴィティが指摘しているように<sup>(21)</sup>、芭蕉の影響を否定することはできないだろう。

これまでの推察をまとめると、セフェリスは実際にフランスでの「俳諧」の大流行を見聞きすることで、「俳句」を知り、自らも「俳句」を試作しつつ、パウンドや芭蕉の「俳句」を通して俳句の思想を学ぼうとしたのではないかということが、詩人の「俳句」受容の過程として示唆されると思われる。

### 3.セフェリスの俳句

現在までに確認されている約40句の「俳句」のうち上述の翻訳詩3句を除いて、詩集『練習帖』及び『練習帖2』に収められているのが17句であるのに対して、半数は詩人の『日記』に記され、詩作品としては未発表であると言えよう。また詩集『練習帖』に入れられている「16の「俳句」」（参照、註6）に関しても発表作品であるものの、詩人自ら註を添えている<sup>(22)</sup>ように、何れの他の詩集にも組み入れられない詩を集めたのが『練習帖』であることから、詩人の他の作品と比べて「俳句」は習作の域を出ていなかったのではないと思われる。換言すれば、発表・未発表の別に係わらず、（詩人の作品中）「俳句」は練習作の段階で終わっていると位置づけることができよう。

ここでは、発表作品17句と、『日記』に記された句の中で特徴的な作品を挙げて整理してみたい。

#### 3.1.『練習帖』と『練習帖2』より

発表作品17句のうち「エフェソス」という題をもつ1句以外は全て『練習帖』の中の「16の「俳句」」に入っている。この16句には詩集に収められた順序を示すため詩人が番号を付している。尚、日本語訳は「エフェソス」

以外志田信男訳を用いた。

a) ギリシア的詩調をもつ「俳句」

セフェリスのみならず現代ギリシア詩に一般的な作詩法の一つに神話やホメロス、古典悲劇のモチーフを読み込む手法がある。次の2句はこの手法が用いられている。

13. ΑΡΡΩΣΤΗ ΕΡΙΝΤΣ

Δὲν ἔχει μάτια/ τὰ φίδια ποὺ κρατοῦσε/ τῆς τρῶν τὰ χέρια.

病めるエリニユス

あのひとは眼をもたぬ／手にした蛇どもが／その手を貪り食う

14.

Τούτη ἡ κολόνα/ ἔχει μιὰ τρύπα, βλέπεις/ τὴν Περσεφόνη;

この円柱には孔がある／見えるかい／ペルセフォネが

次の句は神話や古典作品からのテーマではなく、豊穡と多産を願う豊かさの象徴であるザクロの実を大晦日に割る、というギリシアの習慣が背景にある<sup>(23)</sup>。

9. ΝΕΑ ΜΟΙΡΑ

Γυμνή γυναίκα/ τὸ ρόδι ποὺ ἔσπασε ἦταν/ γεμάτο ἀστέρια

新しい運命

裸婦／はじけたザクロは／満天の星

b) 死、孤独、憂鬱、沈黙など詩人に特徴的な情調をもつもの

4.

Νά'ναι ἡ φωνὴ/ πεθαμένων φίλων μας/ ἢ φωνογράφος;

あれは死んだ友だちの／声かしら／それとも蓄音機の？

6.

Συλλογισμένο/ τὸ στήθος τῆς βαρὺ/ μὲς στὸν καθρέφτη.

物想いに沈んで／重たげなあのひとの胸／鏡の中で

8.

Νύχτα, ὁ ἀέρας/ ὁ χωρισμὸς ἀπλώνει/ καὶ κυματίζει.

夜、風／別離が広がり／波うつ

10.

Τώρα σηκώνω/ μιὰ νεκρὴ πεταλούδα/ χωρὶς φτιασίδι.  
ふと手にとる / 死せる蝶 / 化粧もせずに

12. ΑΓΟΝΟΣ ΓΡΑΜΜΗ

Τὸ δοιᾶκι τί ἔχει;/ Ἡ βάρκα γράφει κύκλους/ κι οὔτε ἕνας γλᾶρος  
無益な航路

舵がどうかしたのかしら? / 船は円環をえがきつづけ / 一羽のかもめ  
もない

この他「彫像」「断片」といった詩人が好んで用いるモチーフが次の2句に見られる。

3. ΣΤΟΝ ΚΗΠΟ ΤΟΥ ΜΟΥΣΕΙΟΥ

Ἄδειες καρέκλες/ τ' ἀγάλματα/ γυρίσαν/ στ' ἄλλο μουσεῖο.  
博物館の庭園にて

空っぽの椅子たち / 彫像は帰ってしまった / 別の博物館へ

11.

Ποῦ νὰ μαζεύεις/ τὰ χίλια κομματάκια/ τοῦ κάθε ἀνθρώπου  
どうやってかき集めるんです / 一人一人の人間の / 幾千もの断片を?

c) 重置法が用いられた「俳句」

イマジズム運動の中心的詩人とされるパウンドが提唱した重置法、即ち異なる二つのイメージを重ね合わせることで新たな像を生み出す、或いはそのコントラストがもつ効果を狙うという手法が次の句に窺える。

1.

Στάξε στὴ λίμνη/ μόνο μιὰ στάλα κρασί/ καὶ σβήνει ὁ ἥλιος.  
湖にしたたらしてごらん / ただ一滴（しずく）のワインを / すると太陽が消える

5.

Τὰ δάχτυλά της/ στὸ θαλασσὶ μαντίλι/ κοίτα: κοράλλια.  
海色のスカーフにあてた / あのひとの指 / ほら珊瑚だ



16.

Γράφεις· / τὸ μελάνι λιγόστρεψε / ἡ θάλασσα πληθαίνει.

あなたは物を書き / インクが少なくなりました / 海が増殖いたします

d)その他

数に対する概念は洋の東西により或いは民族により異なることは哲学、宗教学、民族学などの様々な分野で明らかにされている。ギリシア人にとって偶数は調和を表すものと捉えられている他宗教上3は神聖な数であると言われる<sup>(24)</sup>。これに対して俳句のもつリズムは我々日本人にとっては親しみのある拍子であるが、欧米人にとっては5-7-5の音律はとても異国情緒を醸し出すものらしい。それ故に季語、切れ字といった手法は注目されず、俳句のリズムが取り立てて着目され、5-7-5の音律をもつ無韻三行詩という詩型が生まれたのではないかと考えられる。

少し脱線したが、次に挙げる句は数あそびと読むことができよう。

2.

Στὸν κάμπο οὐτ' ἕνα / τετράφυλλο τριφύλλι. / ποιὸς φταίει ἀπ' τοὺς  
τρεῖς;

野には一つだになし / 四つ葉のクローバー / 三つ葉のどれのせいかしら?

次の句は素描詩であるが、沈もうとするのは太陽ではなく、太陽に相対する詩人をとり囲む世界の方であるという視点が効果的である。

15.

Βουλιάζει ὁ κόσμος / κρατήσου, θὰ σ' ἀφήσει / μόνο στὸν ἥλιο.

世界が沈む / ぶら下がりがたまえ、置き去りにされるよ / 日向にひとりぼっち

もう一句素描詩を挙げる。「エフェソス」という題が示す如く、小アジアのエフェソスを訪れた時の「俳句」である。かなりの広がりをもつ大理石から成る遺跡の石の間に咲くシクラメンが詠まれている。

ΕΦΕΣΟΣ

Ἦστὸσο σκύβουν / κάτω ἀπ' τὸ βῆμα τοῦ θεοῦ / τὰ κυκλάμια.

Ἰγκυρα, 30.10.1950

エフェソス

身をかがめ／神の御足に／シクラメン

アンカラ 1950年10月30日 (訳: 筆者)

最後の一句は聴覚的效果をもつ。動詞 βελάζωは羊や山羊の鳴き声からできた動詞である。

7.

Φόρεσα πάλι/ τὴ φυλλωσιὰ τοῦ δέντρου/ κι ἐσὺ βελάζεις.

またわたしはまた／その樹の群葉を／するとあなたはめーと鳴く

### 3.2. 『日記』より

上述した翻訳詩と17句の詩集に収められた作品の他に、7巻に及ぶ『日記』に収められた19句の未発表の或いは詩集に入れなかった作品がある。ここで、19句の中で特徴のある句を挙げたいと思う。(日本語訳は筆者。出典について、頁の前の数字は『日記』の巻を示している。)

#### a) 素描詩

最初の三句には季語となる語がみられる。詩人は俳句詩型を用いて「俳句」を詠んだものの、その作品には季語を詠み込んだものは少なく、俳句とは趣を異にしている印象を与える。この意味で、次に挙げる作品は我々日本人には理解され易いものと言えるだろう。

#### ・ OMONIA

Ἡλῖος καὶ Ἰούλιος/ στὰ πεζοδρόμια βόσκουν/ βυζιὰ κοπάδια.

オモニア 広場

太陽そして七月／歩道では／乳房の群れが草を食む

(1.p.110.1929年6月25日)

Ἐκεῖ ποὺ ὁ γήλιος/ το αἷμα, τὸ σῶμα, ὁ γιालός,/ τῶρα τρεῖς γλάροι  
太陽／血、肉体、海／今は鷗が三羽

(2.p.86.1932年8月27日)

Κάτι πιστεύουν/ οἱ μυγδαλιές ποὺ ἀνθίσαν/ μέσα στο χιόνι.  
何か信じている／花をつけたアーモンドの樹／雪の中

Νύχτα ὠραία/ Νύχτα εἰρηνοφόρα./ Τέλειος οὐρανός.

夜は素晴しく／平安をもたらす／完璧な空

(4.p.22.1941年2月11日)

b) 仮面、皺、彫像といったセフェリスが繰り返し用いたモチーフをもつ「俳句」

3.1.b)でも触れたが、特に仮面、彫像は人間そのものを表すモチーフでセフェリスが好んで用いた。

・ ΔΗΘΗ

Ἡ προσωπίδα / ποὺ τραγικά εἶχες βάψει / κύλησε χάμω.

レーター

あなたが悲劇的に色を塗った／仮面が／落下した

(1.p.119.1930年1月19日)

・ ΡΥΤΙΔΕΣ

Τὰ πρόσωπά σας / πατοῦν τὴ νύχτα χῆνες. / Μὴν τὶς τρομάζεις.

わたしたちの面が／夜、鷺鳥を踏む／驚かしてはいけないよ

(1.p.135.1931年5月5日)

・ Τὰ σιγιλλάρια / πέσαν κεραυνωμένα' / κόψαν τοὺς σπάγγους.

小さな彫像が／稲妻に打たれて倒れた／紐を断ち切ったのだ

(2.p.85.1932年8月27日)

c)愛をうたった「俳句」

・ ΤΟ ΘΕΑΘΗΝΑΙ

Διωγμένη ἀγάπη, / φεύγεις φορώντας μαῦρο / ψηλὸ καπέλο.

疑装

追いやられた愛／去りゆく／シルクハットをかぶり

(1.p.109.1929年5月6日)

・ Μὴ ζωγραφίζεις / μ' ἄλογα ποὺ καλπάζουν / τὴν ἡδονή σου.

描かぬよう／駆走する馬で／あなたの悦びを

(2.p.85.1932年8月27日)

・ Τὰ χεῖλια σου / εἶναι κύμα μέσα στὸν ὕπνο, / πλεούμενο σῶμα.

あなたのくちびるは／夢の中の波／ただよう肉体

(同上)

#### 4.展望

これまでセフェリスの残した「俳句」を通して現代ギリシア詩に於ける「俳句」及び俳句詩型が受容された過程の考察を試みた。全体的に「俳句」

に関するギリシア語による記述が限られている由、推論の域を出ていないことは否めない。今後は、詩人の作品に於ける俳句、禅思想の影響を調べてみたい。

昨年ギリシアでもギリシア人による「俳句」コンテストが開催され、鑑賞する「俳句」から詠む「俳句」へと移行しつつあるという感じを受けた。入賞者の作品に接して、徐々にではあるが、俳句の様々な手法も知られるようになって来たという印象を受けた。今後どのような「俳句」が詩壇に登場するか興味あるところであろう。

尚、本稿は1993年7月10日に開かれた第五回ギリシア語・文学研究発表会での発表内容に加筆修正したものである。

## 5. 資料及び参考文献

### 5.1. セフェリスに関する資料

- ・ Σεφέρης Γ., ΠΟΙΗΜΑΤΑ εκδ. Ίκαρος, Αθήνα, <sup>12</sup>1989.  
Τετράδιο Γυμνασμάτων Β', εκδ. Ίκαρος, Αθήνα, 1976.  
Αντιγραφές, εκδ. Ίκαρος, Αθήνα, 1965.  
Μέρες Α', 1975. Μέρες Β', 1975. Μέρες Γ' 1977. Μέρες Δ', 1977. Μέρες Ε', 1977. Μέρες ΣΤ', 1986. Μέρες Ζ', 1986. 何れも Ίκαρος から.  
Δοκιμές Β', εκδ. Ίκαρος, Αθήνα, <sup>5</sup>1984.
- ・ Γ. Σεφέρης και Αντρέας Καραντώνης: Αλληλογραφία 1931-1960, επιμέλεια: Φώτης Δημητρακόπουλος, εκδ. Καστανιώτη, Αθήνα, 1988.
- ・ Γράμματα Σεφέρη-Λορεντζάτου, επιμέλεια: Ν. Δ. Τριανταφυλλόπουλος, εκδ. Δόμος, Αθήνα, 1990.
- ・ Δασκαλόπουλος Δημ., Εργογραφία Σεφέρη (1931-1979), 9., Ε. Α. Ι. Α., Αθήνα, 1979.
- ・ Δημητρακόπουλος Φώτης, Γιώργος Σεφέρης Το βυσσινί τετράδιο, εκδ. Καστανιώτη, Αθήνα, 1987.
- ・ Αντωνίου Χρήστος, Ο κόσμος της Γοργόνας, Ε. Α. Ι. Α., Αθήνα, 1981.
- ・ Vittì Mario, Φθορά και λόγος: εισαγωγή στην ποίηση του Γ. Σεφέρη, εκδ. Εστία, Αθήνα, 1978.
- ・ Γιανναδάκης Νίκος, Κατάλογος Βιβλιοθήκης Γιώργου και Μάρως Σεφέρη, εκδ. Δήμος Ηρακλείου, Ηράκλειον, 1989.

- ・ *George Seferis Collected Poems*, translated by Edmund Keeley and Philip Sherrard, Anvil press, London, 1986
- ・ *George Seferis: A Poet's Journal Days of 1945-1951*, translated by Athan. Anagnostopoulos, Cambridge, 1975.
- 『セフェリス詩集』志田信男訳、土曜美術社、東京 1991

## 5.2. 「俳句」に関する資料

- ・ (本稿 1.3. で列挙した順序で)

Κριναίος Παύλος, *ΧΑΙ-ΚΑΙ*, περ. Μεγάλη ελληνική εγκυκλοπαίδεια, 41, 1926.  
Χατζηκυριάκος-Γκίκας Ν., *Χαι-και του Στράτου*, περ. ή λέξη, 103, p. 103,  
1991 (初出出典不明) .

Θεοχαρίδης Γιάννης, *Τα πρώτα ελληνικά 25 15 σύλλαβα χαιΐ-καΐ*,  
εκδ. Ι.Γ. Βασιλείου, Αθήνα, 1991.

Αντωνίου Δημ., *Χάι-Κάι και Τάνκα*, εκδ. Ερμής, Αθήνα, 1972.

Νέζος Γιώργος, *Στίγμα Στιγμών*, 1971.

Νόμπελης Ανδρέας, *Ανταυγείες*, εκδ. Νέα Σκέψη, Αθήνα, 1988.

Παυλόπουλος Γιώργος, *Τριαντατρία Χαικού*, εκδ. Στιγμή, Αθήνα, 1990.

Σταύρακας Παναγ., "Τμολόγιο Ζωής", *Αναζητείται Ελπίδα*, 1988.

'*Άσμα Ασμάτων: κεφ. Α΄-Η΄ κατ' επιλογήν απόδοσις εις*  
*Χαι-και*. [1989]

Καραντώνης Γιώργος, "Δώδεκα Χαιΐ-Καΐ", *Περιστατικά*, εκδ. Μπαρμπουνάκη,  
Αθήνα, 1983.

Θωμαΐδου, Ειρήνη, *Χάΐ-κάΐ ή Χάΐκου... όπως θέλετε*, εκδ. Δαβία, Αθήνα,  
1987.

Ραπτη-Τύφωνα Αμαλία, *Χαιΐ-Καΐ*, εκδ. Μαυρίδη, Αθήνα, 1990.

Δέφνε Μ. Όθων, "10 Χαιΐ-Καΐ", *Στιχηρά Ιδιόμερα*, Αθήνα, 1992.

Φριλίγκου Νίτσα, *Χαιΐ-Καΐ*, εκδ. Αιγόκερως.

## 5.3. 参考文献

- ・ Σαββίδης, "Τάνκα και χάικου ή τα νυχτογισεμιά", *Πάνω Νερά*,  
εκδ. Ερμής, Αθήνα, 1973.

志田信男, 「セフェリスと俳句」, 雑誌「俳句とエッセイ」12号 p. 22-23,  
牧羊社, 東京, 1991.

- ・ *Μεγάλη Εγκυκλοπαίδεια της Νεοελληνικής Λογοτεχνίας*, Τομ. 12,  
εκδ. Χάρη Πάτση, Αθήνα.

*Princeton Encyclopedia of Poetry and Poetics*, Princeton Univ.  
Press, U.S.A.1974.

Chamberlain Basil Hall, "Basho and the Japanese Poetical Epigram",  
(Asiatic Society of Japan, 'Transactions' vol.XXX)1902.

佐藤和男『菜の花は移植できるか－比較文学的俳句論－』桜楓社,東京,  
<sup>2</sup>1978.

『俳句からHAIKUへ－米英における俳句の受容－』南雲堂,東京,  
<sup>2</sup>1988.

松尾邦之助「真珠の発見」①-⑬ 雑誌「俳句」13巻1号-12号、14巻1号、  
角川書店,東京,1964-1965.

・ Haikai de Kikakou, traduits pour Kuni MATSUO et Emile Steinilber  
-Oberlin, Crès, Paris, 1927.

The Narrow Road to the Deep North and Other Travel Sketches,  
translated by Nobuyuki YUASA, Penguin Books, Harmonds worth,  
Middlesex, 1966.

尚、セフェリス及び俳句に関する文献は本稿で触れたものに限り掲載した。

## 6. 註

(1) 参照、佐藤 1988.

(2) Σαββίδης, pp. 69. これは Π. クリネオスの作品を示すが、5-7-5 の音律が用  
いられていないため厳密には俳句詩型による詩とは言えない。

(3) 参照、佐藤 1988、松尾 1963-64.

(4) Σαββίδης p. 72.

(5) Μέγ. Εγκ. Νεοελλ. Λογ. vol. 12, p. 237.

(6) 1940 年に出版された『練習帖』に収められていた「14の「俳諧」」はそ  
の後『詩集』（第一版 1950 年）に再編された際、14 句のうち第二句 Ο  
Κουρασμένες が除かれ新たに 3 句が加えられ「16 の「俳諧」」となった。  
更に Σαββίδης 校訂の第 8 版『詩集』（1972 年）に於いて「...俳諧」から  
「...俳句」に改題されたが、Σαββίδης の注によればこの改題は詩人の指  
示によるものである。

(7) Σαββίδης, p. 74.

(8) Λορεντζάτος Ζήσιμος, Αλφαβητάρι, 1969 は私家版のため入手されていない。

(9) Σαββίδης, p. 72.

(10) 志田 (1991) p. 22.

(11) 参照、佐藤 1988.

- (12) 参照, *George Seferis: A Poet's Journal*, p.59. セフェリスが『日記』の中に記している芭蕉と其角のエピソードは B.H. Chamberlain (1902) と松尾邦之助, *Oberlin 共訳 Haikai de Basho de ses disciples* (1936) にも収められている。ここでは『日記』の翻訳者 Αναγνωστόπουλος の指摘を尊重する。
- (13) "ΠΑΝΤΟΤΜ", 初出 雑誌 *Νέα Εστία*, том.11, 1932年 1月 15日 p.59-60. 『練習帖』(1940年)。
- (14) Πέντε συλλαβές/κι' εφτά και πέντε :Χάι- Κάι, /ψυχή τραγουδιού.  
『書簡集』に先行し『日記第1集』(p.109, 1929年 5月 6日)に類似の句がある。  
ΠΟΙΗΤΙΚΗ: Πέντε συλλαβές/κι' εφτά και πέντα. Δες τις! /Οι πεταλούδες.
- (15) 参照, 佐藤 1988.
- (16) 参照, 註(12).
- (17) 詩人のギリシア語訳を直訳した。  
Μια λιμπελούλα/βγάλε της τα φτερά'/πιπεριά.  
其角の句は, 赤とんぼ羽をとったら唐辛子。
- (18) Μια πιπεριά/βάλε της φτερά':/λιμπελούλα.  
芭蕉の句は, 唐辛子羽をつけたら赤とんぼ。
- (19) Φάρσα της μοίρας: κάτ' απ' το κράνος λαλεί/ ένα τριζόνι.
- (20) p.130. Σαββίδηςの注は p.170.
- (21) Vittti, P.180.
- (22) *Τετράδιο Γυμνασμάτων Β'*, p.136.
- (23) Χ.Αντωνίου, 122.
- (24) Ιω.Ε.Καλιτσουνάκης, *Επταδίκαι Έρευναι*, εκδ.Σακελλαρίου, Αθήνα, 1921.

Ιδιαίτερος θα ήθελα να ευχαριστήσω θερμά τον καθηγητή κ. Κ. Μητσάκη για την ευκαιρία που μου έδωσε να συζητήσω μαζί του επάνω σ' αυτό το θέμα, τον καθηγητή κ. Φώτη Δημητρακόπουλο και την κα. Μάρω Γ. Σεφεριάδη για τις πολύτιμες πληροφορίες σχετικώς με τον ποιητή.